【朝夕刊月ぎめ定価4037円（本体価格3738円＋消費税299円）】1部売り朝刊130円・夕刊50円　（第3種郵便物認可）

重度障害者 行き場なく

整備進まぬ災害避難計画

家族ら「在宅支援が現実的」

医療の進化に伴い、重度心身障害者・児は増え、多くは高度な医療機器と家族の献身的な看護に支えられて自宅で暮らす。生命線とも言える電源の途絶など、環境の激変をもたらす大災害は深刻な脅威だが、その避難支援態勢は未整備のままだ。家族らは「災害時どころか、平時でも受け入れてくれる病院は限られている。重度心身障害者の実情をもっと知ってほしい」と悲痛な声を上げる。

（1面参照）

神戸市東灘区の若野萌さん(27)は、生まれた時から最重度の脳性まひがある。自分で食べ物をのみ込むのが難しくなり、小学6年から管を通して栄養物を胃に直接入れる「胃ろう」を行い、その後はたんの吸引や酸素投与も必要となった。

週に数日のデイサービスを除いて「ほぼかかりっきり」という母親の俊子さん(60)は「停電になって、バッテリーが切れたら生きられない。でも、現実の日々に一生懸命で、災害時を想像する余裕もない」と話す。

神戸市は高齢者福祉施設など市内303カ所を「福祉避難所」に指定するが、重度心身障害者の受け入れは想定していない。担当者は「重度心身障害者の避難計画は各区役所が個人別に考えるが、全てに対応できていない」と話す。

市は重度心身障害者の避難先として病院を想定するが、「神戸市重度心身障害児（者）父母の会」の武田純子会長(67)は「平時の受診にも困るほど、受け入れる病院は限られている」と指摘する。

阪神・淡路大震災直後、同市東灘区内でのガス漏れ事故で避難勧告が出た際も萌さんと自宅にとどまった俊子さんは「災害でライフラインが途絶えても、自宅で医療を続けるための支援の仕組みをつくってもらった方が現実的かもしれない」と話す。

（森本尚樹）

若野萌さんのたんの吸引を行う母俊子さん。高度な医療機器によって在宅での医療が成り立っているという＝神戸市東灘区